

蒲原の王墓 古津八幡山古墳と豪族の屋敷

展示解説パンフレット

【開催趣旨】

古墳をつくるには多くの労力が必要であるため、古墳の大きさは、形とともにつくった豪族の力を示すひとつの指標と考えられています。古津八幡山古墳（秋葉区）は約 1,600 年前（古墳時代中期の初めころ）につくられた直径 60m の巨大な古墳（円墳）です。県内最大級の大きさで、蒲原平野の各地域の豪族が共同して推し立てた王（有力な豪族）の墓であった可能性が考えられています。古墳をつくった豪族の多くは古墳の近くに屋敷（居館）を構えていました。本企画展では麓にあると推測される古津八幡山古墳をつくった豪族の屋敷についての手がかりを探るべく、麓や周辺の古墳時代の遺跡について、これまでの調査成果や出土遺物について見ていきます。

【古津八幡山古墳がつくられた頃の遺跡】

古津八幡山古墳の盛土の下や周辺では弥生時代後期（紀元前後～250 年）の竪穴住居跡がこれまで 51 基見つかっていますが、一方で古墳時代の建物跡は見つかっておらず、その頃の遺跡は麓にあったと考えられます。古津八幡山遺跡のある丘陵の北麓では森田遺跡、高矢 C 遺跡、舟戸遺跡、塩辛遺跡など古墳時代の遺跡が見つかっています。各遺跡の内容については不明な点が多いですが、年代や立地などから古津八幡山古墳をつくった豪族の屋敷は、古墳から北西約 700m の古津駅周辺に広がる舟戸遺跡が有力です。



古墳上空からみた北麓

【豪族の屋敷（居館）】

「豪族居館」の定義については研究者によってさまざまですが、一般的には、古墳に葬られた豪族（首長）が生前に活動の拠点としていた場所で、居住施設や祭祀遺構、政治的建物、倉庫などの貯蔵施設のほか、手工業生産の工房が存在するものもあり、また周囲に濠や柵、張り出し部などの外郭施設の発達する場合が多いと考えられています。

古墳の形や大きさの違いなどから、古墳をつくった有力者の中にも様々な階層があったと考えられます。新潟大学教授、橋本博文氏は古墳をつくった階層とそれに対応する居住形態について、①大宮（大王）②豪族居館（豪族）③中・小型居館（中小豪族）④屋敷地（富裕農民）の大きく4つに区分しています（橋本博文 2013「古墳時代の居住形態群」『古墳時代の考古学 6 人々の暮らしと社会』同成社）。本企画展ではこの区分の②・③を想定して「豪族居館」という用語を用いています。

これまでに新潟県内では確実な古墳時代の豪族居館遺跡は確認されていません。今後、古津八幡山古墳のある丘陵の麓で豪族居館が発見される可能性は十分あると考えています。

【周辺の遺跡】

古津八幡山遺跡のある丘陵の北麓では森田遺跡、高矢C遺跡、舟戸遺跡、塩辛遺跡など古墳時代の遺跡が見つかっています。それぞれの遺跡の詳細については不明ですが、出土遺物から、森田遺跡が古墳時代前期（4世紀頃）、高矢C遺跡と舟戸遺跡が古墳時代中期（5世紀頃）、塩辛遺跡が古墳時代後期（6世紀頃）を中心とする時期の遺跡と考えられます。古津八幡山古墳（5世紀初め頃）と時期が近い遺跡は高矢C遺跡と舟戸遺跡です。

高矢C遺跡と舟戸遺跡の関係については不明です。近接することから一連の遺跡である可能性もあります。また、舟戸遺跡の東に隣接する塩辛遺跡は、出土遺物から舟戸遺跡のすぐ後に続く遺跡と推測され、舟戸遺跡と一連の遺跡であった可能性が推測されます。

古津八幡山古墳から半径10 km圏内に対象を広げてみると、北約6.5 kmに沖ノ羽遺跡と中田遺跡が存在します。沖ノ羽遺跡は古津八幡山古墳がつけられた頃に出現する遺跡です。これまでの調査成果からは、約1,500年前の古墳時代後期には比較的規模の大きな集落であったと考えられますが、古墳がつけられた頃は小規模な集落であった可能性が推測されます。中田遺跡は調査面積が狭く、遺跡の内容については不明ですが、これまでに有力な豪族の存在を示す遺構や遺物は確認されていません。

【舟戸遺跡の概要】

舟戸遺跡はJR信越本線古津駅の西側に位置します。新津丘陵西側裾部から広がる平坦面にあり、旧大通川の自然堤防上の微高地（現在の標高約5～6 m）に立地しています。遺跡は北東から南西方向に約800m、北西から南東方向に最も距離のあるところで約480mの広い範囲でひろがっています。

現在、遺跡の大部分は宅地や水田、畑です。これまでの調査で確認された弥生・古墳時代の基盤層の標高や調査地点ごとの出土遺物から、遺跡中央付近に東西方向の微高地が存在し、古墳時代にはその微高地を中心に利用していたことが推測されます。昭和53（1978）年国土地理院発行の土地利用図を見ると、古津駅の南側から西へ向かって畑・果樹園が列状にのびており、これがかつての微高地を反映している可能性があります。

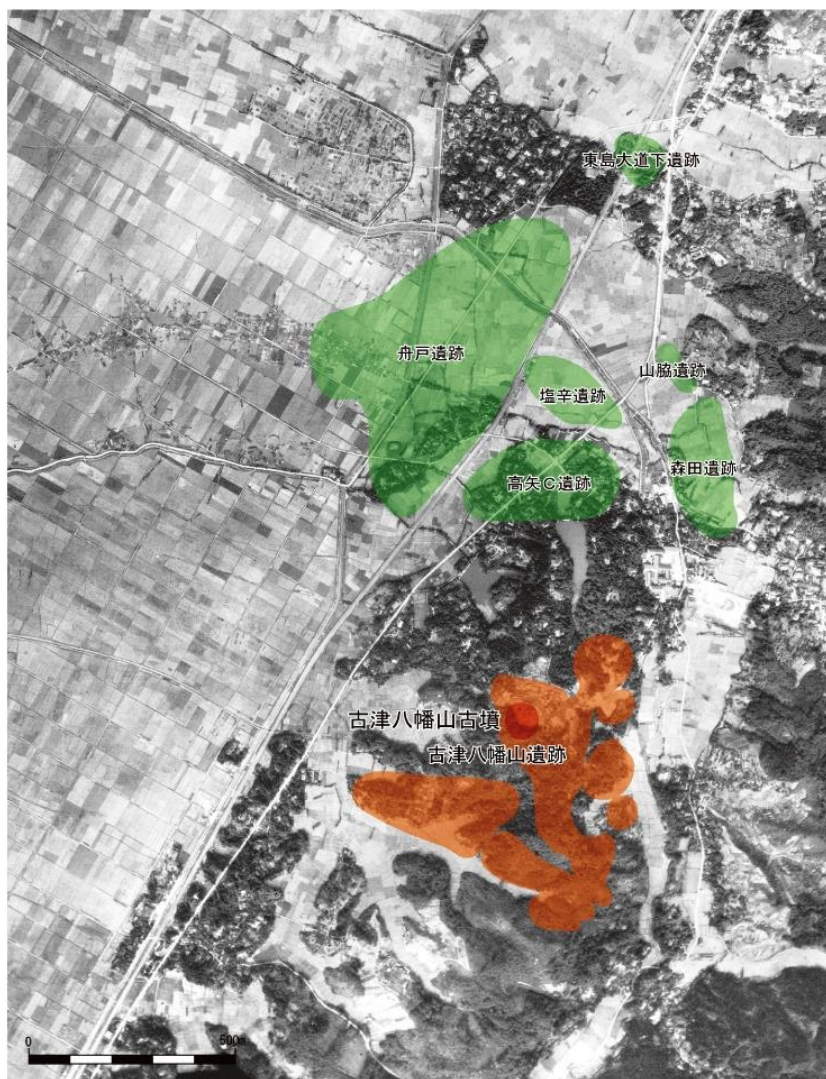
舟戸遺跡の本発掘調査は平成5（1993）年に建設会社の社屋建設にともない、470 m²が調査されました。その結果、弥生時代から平安時代の遺物が出土しましたが、遺物の大半は古墳時代中期（約1,500年前～1,600年前）のものです。舟戸遺跡と古津八幡山古墳は互いに目視できる位置関係にあり、舟戸遺跡から出土している土器の年代と古津八幡山古墳のつけられた年代も重複しています。破片で3万点以上とまとまった量の土器から、一定期間人々が定住した遺跡であると考えられています。

【舟戸遺跡の遺構】

古墳時代中期の竪穴住居や掘立柱建物、直線的に約1mごとに等間隔で配置された杭の列などが見つかりました。出土した土器の年代や竪穴住居・掘立柱建物の向きの違いなどからは、少なくとも2時期にわたって遺跡が営まれていたことが推測されます。

柱と杭を比較すると、柱は直径が15cm前後で先端部が平らに加工されているのに対し、杭は直径10cm未満のものが多く、先端部は鉛筆の芯のように尖らす加工が行われていました。柱の方が杭に比べて直径が大きく、また先端部の加工が柱と杭でそれぞれ異なっていることが分かります。

舟戸遺跡の杭列の広がりについては、調査範囲が限られているため不明です。しかし杭列は豪族居館の多くで認められており、舟戸遺跡が豪族の屋敷（居館）である可能性を高める一つの要素として注目されます。



古津八幡山古墳周辺の古墳時代の遺跡



舟戸遺跡調査風景



舟戸遺跡の竪穴住居跡



舟戸遺跡の杭列



森田遺跡出土土器



舟戸遺跡出土土器



塩辛遺跡出土土器

【おわりに】

本企画展では、古津八幡山古墳周辺の古墳がつくられた頃（西暦5世紀・古墳時代中期）の遺跡を概観してきました。現時点で、古津八幡山古墳をつくった遺跡としては舟戸遺跡が最も有力な遺跡といえます。舟戸遺跡は調査範囲が限られており、遺跡の内容については不明な点が多いです。しかし、古津八幡山古墳よりやや新しい時期になりますが、舟戸遺跡の竪穴住居のひとつは、県内で最も早い時期にカマドを採用している可能性があるなど、有力な集落であったことは間違いありません。これまでに豪族居館の根拠のひとつとなる建物群の周囲を囲む堀（濠）などは確認されていませんが、杭列の存在は豪族居館になり得る可能性を示すものとして注目されます。

今後、周辺集落も含め調査・研究を行い、古津八幡山古墳がつくられた背景について明らかにしていく予定です。



復元整備後の古津八幡山古墳

☆お知らせ☆

古津八幡山古墳の復元整備が終わり、4/17 から公開いたします。

古墳の頂上からは蒲原平野を一望できます。まだ現地に行かれたことのない方は、この機会に1,600年の時をこえてよみがえった新潟県内最大級の古墳の大きさなどを現地で体感し、当時の暮らしに思いをめぐらせてみてはいかがでしょうか。

史跡古津八幡山遺跡 企画展1「古津八幡山古墳の築造と復元整備」

■会 期：2015年4月7日（火）～6月28日（日）
（会期中休館日 4/13・20 5/11 6/1・8・15・22）

■会 場：史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

※新潟市文化財センター学芸員による展示解説

日 時：2015年5月6日（水 祝日）13:30～15:30 申込不要

史跡古津八幡山遺跡 特別企画展1「史跡古津八幡山遺跡の発掘調査と復元整備の歴史」

■会 期：2015年4月21日（火）～5月6日（水）（会期中無休）

■会 場：新潟市新津美術館市民ギャラリー

※新潟市文化財センター学芸員による展示解説

日 時：2015年5月3日（日）13:30～15:30 申込不要

☆関連講座「古津八幡山古墳の過去と未来－歴史的意義と保存活用－」

日 時：4月29日（水 祝日） 13:30～15:30

講 師：若狭 徹氏（高崎市教育委員会）

場 所：新潟市新津美術館レクチャールーム

参加費：無料

定 員：80名（申込不要、当日直接会場へお越しください。）

次回の文化財センター企画展は、企画展2「史跡古津八幡山遺跡の発掘調査と復元整備の歴史」を5月19日（火）～7月12日（日）の間、開催します。